□随　想□

最後のページ

畑　専一郎

この欄では、ひとつたっぷりと自慢をさせてもらって、日ごろのイライラから解放される精神衛生剤にさせてもらうことにしましょう。

自慢のタネは、神戸新聞が四十年度の新聞協会編集賞をもらった、という現象を指してそう申すのです。この賞は、新聞界のノーベル賞だなどと賞をもらった人間はいいたがります。したがって小生もそういいたい気持でいっぱいです。それに、どうしても受賞社は、中央紙が独占とまでは行かなくても、寡占状態になりがちで、地方新聞にはなかなかお鉢が回ってこないしろものです。毎日新聞などは、朝日のお家騒動以来、社内がはりきってしまって、もうほとんど連続状態に近く数回も受賞しているのではないでしょうか。

こんな次第で、神戸新聞受賞の内定の報を受けた晩など、さっそくサスプロの祝賀乾杯ということになり、以後連続深夜の街をほっついて、飲み歩きました。ただスポンサーがついて、祝ってもらったのは、たった一回だということはどういうことでしょうか。それも相手は大学の後輩で、そのうえ同じ社内の広告局にいるH君ですから、手間はいりません。

こんなことで、どうも〝自慢〟のタネについても、その社会的評価があやしいものになってきそうですが、じつは受賞の対象になった「淡路の共同社会開発キャンペーン」は、ぼく自身も、未熟な内容だと思っております。したがって、その内容についての自慢は、実際のところ、こそばい感じがして、それだけの勇気を持ちあわせておりません。

えらい話しがおかしなことになってきましたが、ぼくの自慢したいのは、こちらはともかくとして、ぼくの予想したように、新聞界のほうが変わってきて、たとえ未熟な内容のものにしろ、それに賞を出さねばならなくなってきた予言？の適中にある、といいたいわけです。

これまでも、神戸新聞が選考の過程で、次点く

らいにはいったことはあります。しかし、もれてきこえてくるところによると〝CP方式〟の新聞づくりなどといって、一体あれはなんやねん新聞の本道はあくまで〝天下国家論〟でなけりゃ、外道だ、と、最後には一蹴されてしまっていたようです。

こんなことを書いてきて、ここでふと朝日新聞の村山さんのことを思い出しました。村山さんは、いま不運な身のうえにありますが、村山さんは村山さんなりに、自分の社の近代化を考えられておられたように想像するのです。これも聞いた話なのですが、村山さんは、よく社の編集局などへ出向いて「最後のページから読む朝日新聞をつくれ」と、口やかましかったそうです。

〝最後のページ〟とはいうまでもなく、地方版を意味いたします。地方版は、天下国家論のページではありません。むしろ、ここは、どこどこの地区で、きょうはなん時からなん時まで水道が断水になるとか、ガスがとまるといった日常の生活便利手帳のページ、といってもよいでしょう。このページを魅力あるものにせよ——この考え方は〝大記者〟を持って任じている人たちには、なかなか受け入れられにくいでしょうが、電波メディヤが完全に速報性では新聞を足もとにもよせつけなくなった現在、新聞の生きて行くひとつの活路には間違いないところです。

それどころか〝国〟と〝家〟しかなかった日本の社会に、いまや〝地域社会〟が、第三の構成要素として加わり、〝コミュニティ〟という言葉を、辺地の役場の役人までが、日常語として使うようにもなってきております。〝近隣住区〟〝ネイバフッドユニット〟といった用語さえ、頭のなかに入れておかないと、会議の席上で恥をかいたりします。

この社会の変化に気づき、また米国などでメトロポリタン・ペーパー（日本でいえば全国紙とみていいでしょう）の部数が、地域によりガタ落ちを示し、一方でサバーバン・ペーパー（日本でいえば地方紙とみていいでしょう）が激増している現実を考えたとき、朝日の生き方について、村山さんには村山さん流の新しいビジョンが描かれていたに違いありません。

現に読売新聞なども、最近は神戸の地方版を一ページふやして、二面制としております。だから、村山さんの意図はうしろ向きでもなんでもなかったと思うのですが、おふじさんが介入してきて、問題はややこしくなってしまったと評するほかにはありません。

ことしの協会社賞の授賞式は、新聞週間の初日の十月二十日、大阪のロイヤルホテルを会場にして行なわれました。

式のすんだあと、ボヤッと立っておりますと村山さんが近づいてこられて、丁重に「よかったですね」とあいさつされました。ほかにも、他社の受賞者もいましたが、どうもあいさつは、ぼくだけに限定されておりました。といって、ぼくは村山さんとは初対面なのです。

ぼくの想像が正しいとすれば、村山さんは、村山さん自身に向って発せられた自己確認の言葉ではなかったでしょうか。

〈神戸新聞主筆〉

□連載随想□最終回

雀雀庵

阪本　勝

さる十一月十四日の日曜日、有馬温泉の某所で小学時代のクラス会がもたれた。十六、七人集まったが、五十余年前の悪童どもの寄りあいとしては、出席率まずは上上といえるだろう。

ぼくは尼崎の第一尋常小学校（いまの城内小学校）に四年生のときまでいたのだが、眼医者のくせに父が眼病を患って大阪天満の母の里で療養することになったので、しぜんぼくも、大阪北区の造幣局裏の滝川小学校に転校した。だから卒業は滝小なんだが、滝小時代の友だちはいまはひとりもなく、尼崎の連中とだけ、ときおりクラス会をやるならわしになっている。

こんどの会は四年ぶりだが、ながいあいだにずいぶん変わったやつもいるし、あまり変わらぬやつもいる。テラテラの無一毛居士になったのもあるし、ふさふさした黒髪のぬしもある。中学校に進んだものは一人もなく、商売人や職人が圧倒的に多い。ブリキ屋さん、米屋さん、下駄屋さん、八百屋さんなどだ。なかでもブリキ屋さんは二人もいる。商売柄つきあいでおぼえたのだろう。みなよく飲む。そして尼弁をまじえてよくしゃべる。

「宗玉子ちゅう女の先生べっぴんやったなあ」

「オイヤ、オイヤ、」

「サカモト、おまえだけおやじのスネかじって大学まで出してもろて、果報なやっちゃ」

「オイヤ、オイヤ」

オイヤとは尼弁で「そうだ」という意味だ。

そのうち笹井というブリキ屋がこんなことをいった。

「サカモト、おまえ酒のみやが、雀を酔わせて捕る方法知っとるか」

「知っとるよ。焼酎に浸した米を乾かして雀にやると、すぐ眠りよる。そこへピーナッツをまいておくと、こりゃええ枕やおもて、ピーナッツ枕にすやすや寝よる……」

「あっ、知っとるな。大学でならったんか」

「オイヤ」
「さすがえらいもんや。そやけど焼酎で雀が酔っぱらうのはわかるが、ナンキンマメ枕に寝よるか」
「寝よる、寝よる、すやすや寝よる……」
「ほんまかいな」
「ほんまや、ほんまや。大学の先生のいうことにウソはない」
すると笹井はちょっと腕を組んで、
「雀ちゅうやつ、うらやましいやっちゃな。わい、雀になりたい」
とまじめな顔していった。
「なんでや」
「朝から晩まで、ガチャン、ガチャン、ブリキたたくのがもうツロなってん。それに不景気ですきな酒ものめんしなあ」
吉田という乾物屋が、
「焼鳥にされて食われてもええのんか」
「ええ、ええ、本望や。ナンキンマメ枕に成仏か、ええなあ」
そこへ、ふたりだけ生きのこっている恩師のうちのひとり、N先生がおくればせながら現われた酒のみで知られた老翁である。一同破れるような拍手。吉田が笹井の方を指さして、
「先生、こいつ雀になりたいいいよりまんねん」
キョトンとしていたN先生は、わけをきいて破顔一笑、
「そらええ、そらええ。わしも雀になりたいわ八十過ぎて好きなおみきものめん今の身や。ナンキンマメ枕に、すやすやあの世に行ってみたいなあ……」
とつぶやくようにいって、目をしょぼしょぼさせた。
「先生」
とそのとき有沢という貸本屋がいった。
「先生とこに額ありますか」
「ない、そんなけっこうなもん。孫の家に居候の身やもんな」
「ほんなら、こうしまひょ。ここでサカモトに雀雀庵と書いてもろて額にしまひょ。それ先生のとこに持っていきまっさ」
拍手が湧いた。やがてぼくは、仲居がはこんできた紙に、良寛風の字をまねて、〝雀雀庵〟と書いた。先生はなんべんも頭をさげて礼をいった。
一同は急にげんきづいて、また盃をかたむけはじめた。だれいうとなく、
「今年はもう会えん、きょうが忘年会や。ええ忘年会やな。そやろ。来年はええ年とろな」
「オイヤ、オイヤ」
「先生百まで生きとくなはれや。雀百まで何とやらだっさかいな」
「おおきに、おおきに……」
「サカモト、さ、ぐっとあけろ」
ぼくはつがれた盃をほして、ななめに降る山雨を眺めた。渓流の音がとうとうときこえた。ふとぼくは、昔から好きな古詩を思い出して心で吟じた。

燭(ひともし)を背(そむ)けて共に憐れむ深夜の月
花を踏んで同じく惜しむ少年の春

〈随　筆　家〉

□随想□

ひゃくまんドルのやけい

阪口保

このあいだ、大正三年に中学を卒業した連中の集まりが京都であった。百二十人ばかりの同級生のなかで半数近く生き残っており、そのうち二十人程が集まった。頭髪の黒いのが一人だけあり、あとは皆すこぶる怪しげな頭が並んでいるので、わが意を強うした。

テンバという仇名の先生があったなア。うん、あの先生の本名は生駒章、号は胆山。生駒山を日本書紀などに胆駒山と書いてあるのでそう号したのだと甚だ物憶えのよい奴もあったものだ。なぜテンバという名がついたのだろうといったら、あの先生の一物は長大なので〝天馬の如し〟という意味だと外の奴がいった。そういえば、竹刀の柄の皮製の落とし物に〝テンバのルーデサック〟と書いた荷札がつけてぶらさげてあったなア、と話はたわいもないことばかり。在学中にあの先生が古稀の記念だといって、自筆の詩を紅い紙に印刷してくれたが、誰かその詩を覚えているかといってみたが、それはもう誰も記憶している者が無かった。その悪童どものなかの年少者も来年あたりは何れも古稀翁となる。

我々の母校は、京都一中。ノーベル賞を受けた二人の博士が出た学校だから、日本一の中学だよといばる者もあったが、それは他人のふんどしで角力をとるようなものサということに落ちついた。遠方から来た連中は、京都をなつかしがったが、在住の者のなかには、いやあんまり住みよい都会でもないという。どちらをみても、古い歴史の亡霊みたいなものがよどんでいて、たとえば駅の前にタワーを建てると、風致をこわすといって、

青い眼の外人までが騒ぎたてる。そこへ行くと、お前の住んでいる神戸は、気候もよいし、前向きに都市計画がたてられる、ポートタワーとかいうものも、なかなかイカすし、須磨浦のベルトコンベヤーだって、案外風景にマッチしているじゃないかと、原口さんのよろこびそうなことをいってくれた。それに夏は海水浴もできるしなア、というから、私はいった。いや、須磨はもう海水浴はできん。砂浜は塵芥がちらばっているし、海へはいると、船から流す機械油がべっとり身体につくし、白砂青松といえたものじゃ無い。ハワイのワイキキ海岸などは、ヒップの豊かな美人が、裸足で歩いていても、足を切る硝子のかけらも落ちていないし、海は澄み切って底の底まで見えるし……その点、神戸っ子もだらしが無いよ、と。

友人はそれでも、しきりに神戸を讃美して、中国料理はうまいし、百万ドルの夜景は美しいし、この次の同窓会は是非神戸でやってくれという。私がそれに異論をさしはさめば同窓会の世話をすることを忌避することになるし、また僅かな海外旅行を鼻にかけるようにも聞えてもいやだから、心のなかで思ったことだった。神戸の夜景は五十万ドルぐらいで、百万ドルといえば、やっぱり、香港の方だろう。あそこの夜景は、九竜側から眺めても、香港島の方から眺めても、間に海峡をへだてて、しっくりと落ちついて見える。ひとつはネオンが明滅しないから、いっそう気分を静まらせるためでもあるらしい。

それは、九竜側から海峡に向かって、啓徳（カイタク）空港が突き出ており、苦し全香港のネオンが点滅したら、飛行機が夜間着陸の目標を見失うから、その信号灯以外は点滅させないのである。夜間着陸のみに限らず、一九六一年四月に啓徳空港から発進した米軍DCI3型機が離陸後まもなく香港島西部の山に衝突して、米軍人十六人の死傷者を出したことがある。そうした地形上の制約が香港の夜景をして美しからしめているのである。さればといって、私は神戸港—淡路島の地形が、九竜半島—香港島の如くであればよいと願っているわけではさらさら無い。況んや〝香港はいまや米帝国主義のベトナム作戦基地になり下がっている〟と中共系紙が指摘するような空港が、神戸に存在すれば、神戸の夜景が百万ドルになるであろうのにといっているのでももちろん無い。

米軍の啓徳空港使用料は無料で、離着陸に当たって飛行場当局に申請する義務がない、また軍事機密の保持を理由に、乗組人員氏名を報告しなくてもよいことになっているといわれている。それを対岸のネオン視していると、わが国にも施政権の及ばない沖縄があるし、内地にも安保条約による米軍の軍事基地があって、例えば板付には台風避難のためといって、米軍機が事前通告なしに、大挙やってくるのが常である。さすれば夜景が五十万ドルだの百万ドルだのと相場づけをして喜んでいるのは痴人のたわごとであって、平和日本のなかにおける神戸百年後の繁栄を期する神戸っ子の考えるべきことは、まだまだ限りもなくあるということになる。

（神戸山手短期大学教授）

北欧の銘菓

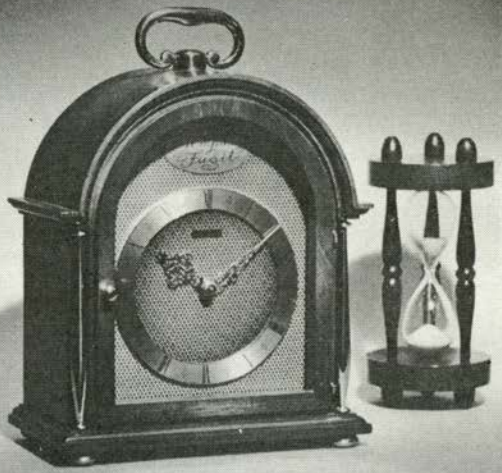
ユーハイム
コンフェクト

YUHAIMU CONFECT

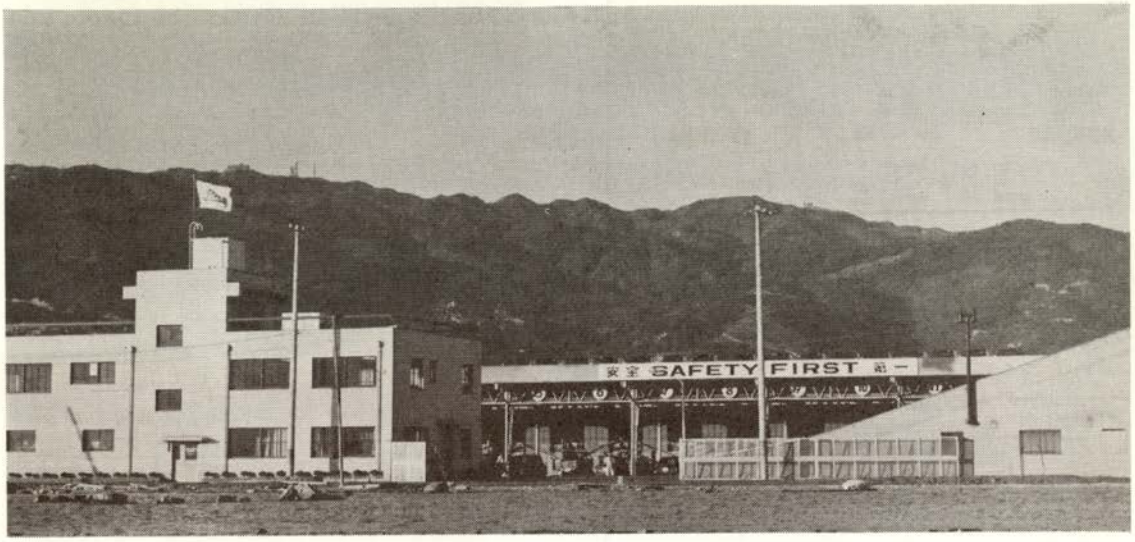
バウムクーヘン
〈ピラミッドケーキ〉
クッキー
ムンデット
シモン
デビルドチーズビスケット
各種高級洋菓子

本社・工場／神戸市葺合区熊内町１丁目ＴＥＬ22－1164・9865
熊内店／(市立美術館隣)
神戸デパート店／長田区大橋五丁目電停前ＴＥＬ61－1201～10
三宮店／三宮生田筋(階上喫茶室)ＴＥＬ33－7343・0156・4314
神戸／大丸店・阪急店・鉄道弘済会・三越店

あなたの夜をなぐさめる
ドイツ製 ユンハンス
エレクトロ・ゴング

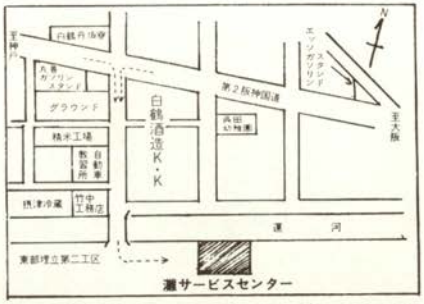


特約店
美田時計店
元町店・元町三丁目 TEL33－1798
三宮店・三宮地下街 TEL33－8798



灘サービスセンター新設

拝啓、時下益々御清祥のこととお慶び申し上げます。平素は格別のお引立に預り厚くお礼申し上げます。
さて、当社は昭和40年10月21日兵庫日野デーゼル(株)神戸日野モーター(株)二社合併による業務の拡張に伴ない予ねてより東灘にサービス工場を建設中のところこの程竣工11月25日(木)より「灘サービスセンター」として業務開始の運びとなりました。この上は近代的な整備工場の全機能を挙げてユーザー各位の御要望に副うべく社員一同みなさまのお越を心よりお待ちしております。



★所在地　神戸市東灘区住吉浜町15
TEL　(84) 0194・(85) 1890

兵庫日野自動車株式会社

取締役社長　後藤末二
生田区相生町2丁目331　TEL(34)7651(代表)

★神子っ戸放談★

世界に雄飛する神戸の技術

外島健吉〈株式会社神戸製鋼所取締役社長〉

明るくて暖かい風土

「大阪で生まれて、上福島の小学校から北野中学校、そして京都へ行って三高、京大です。しかし、子供のころから、神戸にはよく来ていました。叔母が神戸一中の近所におって、この叔母にかわいがられてしょっちゅう行き来したんです。そのころはまだ阪神電車が春日野道までしかきていなかったな。大学を卒業したのは昭和二年で、東尻池にあった新家自転車に入ったんです。当時大学出のものならなんでも知ってるやろと思われてね。これだけの金があるから、こんな工場を建ててくれということになった。それでなんとかやりとおしました。この時代、五年間の経験でしたが、神戸製鋼に入るまえに人生のウラオモテを踏んできたわけだな。神戸製鋼では味わえないようなことも、いろいろ覚えましたよ。この経験が神戸製鋼に入ってからずいぶん役に立ちました。昭

和七年に入って、十三年まで神戸で勤務していたんだが、結婚当時は六甲道に住んで、国道電車で会社に通った。ちょうど終点が会社だったのだからね。国電ができたのはその後だな。戦後はまた神戸に戻って二十年たちます。神戸は気候がよいし、明るくて暖かい。昔から好きやったなァ。人情も、この環境のつくり出す雰囲気によるんでしょうな。

神戸製鋼は神戸が発祥ですから、よほどのことがない限り本社を東京にかえようという気はない。工場も神戸が最大ですからね。」

公害防止装置に先端をきる

「神戸はなんといっても港を中心にして発展してきたのだから、神戸製鋼では外国に対する親近感が強いのですよ。他社にくらべて輸出比率が多いんです。日本は原料を輸入して、これを加工したものを輸出する。神戸は輸入される物質を扱うところで、そこに工場をもっているんだからね。プラント輸出の先鞭をつけたのが神戸製鋼です。パキスタンに肥料工場を建てたり、ソ連に酸素製造装置を据えつけに行ったり、海外に出ている社員は多いですよ。常時一〇〇人以上が機械の設営やアフターサービスで行ってます。輸出が機械部門で二割五分から三割。それを今年は四割までもっていこうと思ってます。輸出の条件が揃っているし、神戸の人間は輸出の経験が豊富ですからね。八幡や釜石にくらべて、バックグラウンドがよい。外国船が入ってきて、船員にとって楽しめる街があるんだから強い。それだけ条件のよい船が使える。結局運賃が安くつくことになります。全体の平均で輸出が二割になります。年間千七百億の売上高で、その二割ですな。

神戸で山を崩して海を埋めたてたのは、ウチがはじめて工夫したんですよ。大きな埋めたてするのに神戸は海が深くて岩盤が多い。そのころは砂を吸いあげてやるのが常識だったが、それができない。だから山を崩してダンプカーで運ぶようになった。ダンプで土砂を運ぶほうの草分けです。いまは宅地造成のあとで事故が起きているが、神戸製鋼でやったところは事故なしだ。はじめてだから条件のよいところをえらべたこともあるんだが、最初から計算したうえで、山を崩し、宅地を造成しているが安全については十分配慮してある。いま完全に埋立地はできました。

都会の中に工場ができると、いわゆる公害の問題になることが起こる。神戸製鋼では七年まえに公害防止設備をつくって、煙が出ないようにした。これも草分けなんですがね。そのとき公害防止設備に投資した分は、固定資産税を免除せよといったんだが、当時はダメやった。いまはもうそうなっとる。まァ、みんなに喜ばれているからそれでいいが、先覚者は損をしたわけですよ。

毎年どこか海外に出かけるのですが、今年はメキシコとインド、パキスタン、ソ連に行ってきました。輸出先は全世界、二次・三次製品は東南アジアが多いし、鋼材に近いものはアメリカが多い。まぁ、マラヤ、タイ、フィリピン、韓国、インド、パキスタンなどが多いですな。外国へ行くと、面白いことに「ニホン」より「コウベ」のほうが知られている。「コウベセイコウ」の「コウベ」とミナト「コウベ」で有名なんですよ。」

港湾設備には国の投資を

「神戸はこの港中心にやらなくてはいかん。現在でも、規模は小さいが世界の優秀港のうちに入ります。輸出の中継地として背景が大きいから、大型船は神戸から出ていくことにならないとウソなんで、貿易を使命として街が発展することですな。観光の窓口でもあるんだから、外人に対する応対を世界的に考えたらいい。みょうな偏見は神戸にはないけれど、日本は日本としてのプライドをもった態度がなければいけないんだ。いま、それが次第にできてきているからね。

港湾設備がもっと拡充されなくちゃいけないな。港湾

は市が管理しているが、市の財政だけでまかなってはならぬのです。設備投資の主体は国で、国の財政でまかなうのが半分以上あってよい。そのうえで市が管理するのならわかりますがね。そして、港は重点的に発展させたらいい。大阪も名古屋も横浜も東京も、みんな同じ性格にするんじゃなしに、特色をいかしていかなければならない。いま港湾行政が一本化されていないから、行きとどかないところが多い。台風がくると水が入ってくるのは、毎年の例だけど、防波堤、防潮堤の計画はどうなっとるのか。西神戸の防潮堤、あれは安ものですよ。文句をいえんような人が被害を受けている。神戸製鋼でも、大きな被害を受けてます。台風で二日工場をとめられると何億という損失なんですからな。やはり、政治の貧困があるんでしょう。防波堤も、何年までに完成する。というのならわかるが、いつ工事にかかるかわからんものがあったりすると困る」

スッキリしている神戸の女性

「このあいださんちかタウンにはじめて行ってみました。あれはものすごいもんができたなあ。人に聞いたら、梅田の地下街は人がガチャガチャしておっていかん、神戸の方がよい、という。換気なんかの装置は、新しくっていいんでしょう。店の方はこれから努力しだいで、十分採算とれるようになるでしょうな。東京にはないセンスのこもった小物を売っている店が多いし、さんちかからセンター街を通って元町の方へ行くショッピングコースには、銀座にないもんがある。服装だって、若い女性はスッキリしている。銀座は田舎もんが多いせいか、ムチャクチャやなあ。最近は新幹線ができたから、午前中は銀座をブラつき、夕方は神戸で遊んでいる、というようなこともできるようになった。東京の女の子が神戸に買物にやってきますよ。それから女性といえば、ソ連には何回か行ったが、三、四年前まではみんな黒っぽい服装をしとった。ところが今年の夏、鉄鋼使節団で行ったときには、色物のワンピース、ツーピースをきてますよ。それでも色が冴えないんだなあ。靴下も薄くていいのがない。口紅はみんなつけてましたがね。消費物質はこれからなんでしょう」

たよりない邦画のシーン

「趣味といえば、歌沢をやるんです。江戸時代の末期に端歌から出てふしまわしを多くしたものです。シブサがあって小唄よりええやろな。映画はときどき見に行かんと、時勢に遅れると思って、最近では「007」を見ました。それから、収容所から逃げだす――「大脱走」ですか。おいろけのあるヤツを見に行こうとしても、チャンスがないですね。邦画でも面白いもんがあれば行きます。邦画ではキスシーンでもコワゴワやっているようで頼りない。外国映画は実感があるんだな。昔は、京都時代にバイオリンを習っていたので、音楽会によく行きました。いまは行ってないな。

ボクのことばは関西弁が抜けない。神戸、大阪、京都でずっと暮してきたんだから、それでいいんでしょう。東京に行っても、こんなことばです。その関西弁と、民主的な空気はつながるのかもしらんな。神戸はそれがサカンだし、ボク自身も感覚が民主的なんだ。組合の連中と心やすく会う。これはなかなかむずかしいことですがね。ついちょっとまえに、城崎に行っていたが、あそこはグルーミーなんだ。神戸に帰ってきたら、開放的なんだなあ。気分的に朗らかになる。ウチでは毎年クリスマス・カードと年賀状を一緒にして送ってるんだが、それが川西英さんの「神戸百景」からのものです。外国のクリスマスというのは、期間が長い。そのとき親類縁者が集まる習慣になっとる。日本みたいにバカ騒ぎはしないが、ゆっくりと楽しむのでしょう。東洋人気質というか、日本、朝鮮、フィリピンあたりは遊び好きなんだ。欧米には限られた会員のための遊び場はあるが、大衆のナイトクラブはない。東洋にくると遊びの趣きがかなりちがうんですな」

（文責・編集部）

経済ポケットジャーナル

確立した浅田体制

浅田長平氏が神戸商工会議所会頭に選任されたのが昨年十一月十日。それまで沈滞していた神戸経済界もようやく胎動を始め、最近の動向は非常に活発なものとなっており、浅田体制は確立、スムーズに進展している。老軀ともいえぬ活躍で、目を見張らせるものがあり、今後の活躍、指導をさらに期待したい。

浅田体制の特色は瀬戸内経済圏確立のための経済交流の強化である。四国経済界、京都、大阪両商工会議所はじめ、この二日には岡山経済界と懇談会を行ない、近く鳥取、宮津（京都）、豊岡三商工会議所との交流も企画している。とかくバラバラで利害の対立している各地の経済界も話し合いによって相互理解を促進し長期的には瀬戸内経済圏の確立をめざして動いているわけである。

山陽新幹線期成同盟設立

山陽新幹線表六甲ルート期成同盟の設立総会が十一月一日、オリエンタルホテルで開かれ、浅田会頭が期成同盟会長に選出された。この同盟は神戸のあらゆる経済団体、業種団体が参加し、兵庫県、神戸市と一体的なものとして発足したものだが、浅田会頭が潤滑油となって県、市、財界の一本化が実現したわけで、県、市、財界の協調は浅田体制第二の特色である。

この同盟は①山陽新幹線の神戸市内通過ルートは表六甲ルートとし②神戸市内に駅を設け、超特急を停車させることを目的としており、さっそく運輸省、国鉄、国会などに申し入れた。国際港都神戸は、観光都市であるのみならず、瀬戸内の玄関口であり、神戸市や市民のためだけでなく、国民経済的にも重要なので、関係当局に強く表六甲案実現などを要望したものである。

世界初の海上空港案

浅田体制の第三の特色は会議所活動の強化、拡充である。近畿に新国際空港を建設せよという提案、ことに世界でも初めての独創的な海上空港案などはその典型的な例といえる。海上空港というのは航空母艦の原理を応用したもので、浮き空港をつくり、海面下に格納庫やターミナルビルを設け、陸上とは連絡橋か地下トンネルで結ぶというもの。滑走路は超音速機用のため四千メートル以上の長さで水上飛行機用の発着場を設け、海中ビルは一部をガラス張りにし、海の中を眺められるようにすることも考えられている。

ベテランのパイロット、造船技師、空港建設者に最終案を練ってもらっているが、海上空港には①騒音が海中に吸収され、公害（騒音）問題が心配ない②建設費は約二千億円で陸上の半分ですむ③漁業補償など補償問題もそれほど困難でない④防潮堤としても利用できる—などの特色があるという。海上空港が実現すれば本州四国連絡橋ともに神戸の大名物となるだろう。

川崎重工で最大のタンカー進水

川崎重工で十一月十一日進水した川崎汽船のタンカー「五十鈴川丸」（一一八、〇〇〇重量トン）は傾斜船台上でつくられた船としては神戸港はもちろん日本最大のものである。これまでの記録は十万トン級のものが最大で川崎重工技術陣の努力で記録が塗り変えられたわけ。

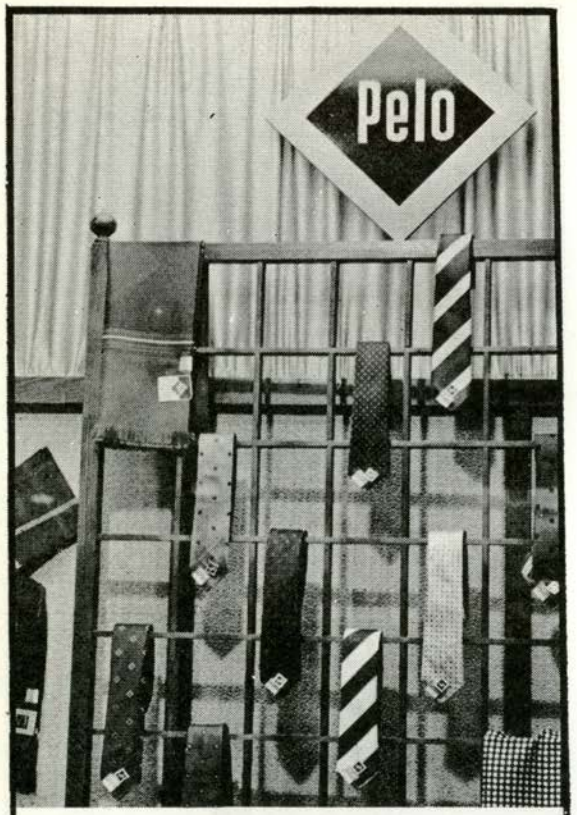
ここ数年、造船界ではバージラインシステム（押し船方式）の研究が盛んになったほか、二分割建造の一般化、経済船型の普及などが顕著な傾向となっており、全般的に技術革新が進んでいる。特に経済船型の普及によって乗組員の大幅減、積載量の増加、建造費の低下などが促進されている。しかし、最近は受注船腹量は一年半分をかかえながらも英国など欧州諸国の進出も盛んであるため、造船業界の一層の奮起が期待されている。

＊KOBEオフィスレディ＊

権藤　千恵子（19才）
三井信託銀行経理課勤務

スポーツならなんでも好きだわとおっしゃる権藤さんは、須磨高校時代卓球部に籍をおき、県大会に出場したというなかなかの腕前。スポーツのほかには音楽とくにラテン系のものが大好きと明るく、清潔な感じのお嬢さん。

入社して1年8カ月。仕事にもなれ、今が一番楽しい時と張り切っている。



ネクタイの

元町バザー

神戸×元町　TEL㉝1401・7031

今、元町中の人気をあつめているのが
神戸眼鏡院の
サンタのショー・ウィンドーです

おしゃれ　メガネの

神戸眼鏡院

元町3丁目 ㉝ 3112 ㊴ 1443
三宮店　三宮地下街　㊴1874－5

おんがら屋

きものと細貨

おんがら屋

神戸

西　店／三宮センター街・電話３３－８８３６(代)

東　店／三宮センター街・電話３３－０６２９

三宮店／三宮地下街・電話３９－４３０３

東京

新橋店／新橋２丁目・電話571－０８０７

銀座店／小松ストアー地階・電話572－５１５１(代)

さんちかレディス　タウン

TEL ㊴ 2855

プリンス

コスチューム

アクセサリーの店

芸夢（げいむ）

神戸店／トアロード ㉝2293 8643

大阪店／心斎橋ロビー　(211)5153 1044

心斎橋名店街(小大丸ビル)　211 8503

るぽるたーじゅ・コウベ

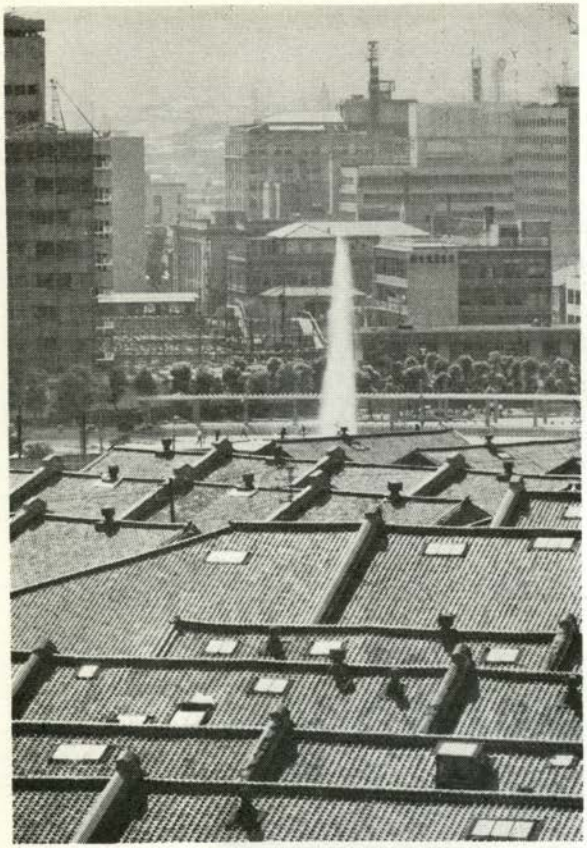
⑰ 最終回

私の神戸感

松原新一／緒方しげを

だれもが神戸は住みよい町だという。海あり山ありで、食べものはうまいし、こんないい町は他にないという。神戸をどう思いますか、ときけば10人のうち9人までが、おそらくそう答えるにちがいない。事実そのとおりであって、私にも異論はない。

気候にめぐまれ、周囲の自然環境も良好ということであれば、快適な市民生活をおくるうえで、行政面の問題を除くと、神戸ほど都合のいい都会は少ないであろう。



神戸の清潔な色を象徴する噴水（市役所南）

私は、自分が神戸に生まれ、神戸に育ったことを得としている。

小松左京氏の証言によれば、大学は京都、勤めは大阪、住まいは神戸という市民生活の理想的なパターンが、いつからか関西には出来上っているそうだ。なるほどそういえば、私自身そのパターンを踏襲していることに気づく。

しかし、たんに気候的に、また環境的に神戸は住み心地のよい町だというだけでは、都市としての神戸の性格を説明したことにはならない。

私は、戦争中の疎開時代と大学時代を除くと、ずっと神戸で生活してきた〝神戸っ子〟だが、長くそこに住んだからといって、その土地のすべてを理解しているというわけではない。

むしろ、あまり神戸になじみすぎていて、ふだん人が空気の存在を意識しないのと同じように、神戸の性格を自覚的にあ

らためて考えようとしなかった、というのが本当である。実をいうと、私のなかには、まとまった神戸観（または感）は出来上っていないというべきだろう。

この「るぽるたーじゅ・コウベ」も、今月でおしまいである。このルポが、どこまで正確に神戸をとらえることができたか心細いかぎりだが、この辺で私なりに私の神戸観をまとめておきたい。それをもってこの「るぽるたーじゅ・コウベ」の締めくくりとしたいのである。

青い空の色

人間の生活している場所には、それがどんな所であろうと、それぞれの場所に個有の《色》というものがある。これはむろん、目にみえる色ではなくて、ひとつの比喩にすぎないが、私どもは、たとえば京都・大阪・神戸の違いを理屈によってではなく、それぞれの町並を歩くだけで判断できるはずである。神戸のスマートなショウウィンドウを見なれた人が、大阪の猛烈な看板をみればびっくりするだろう。それは一例にすぎないが、通行人の視覚に訴える材料の質が違っているからで、そういうものによって人々は、その町の色を見分けているのである。

それならば、いったい神戸にはどんな色がただよっているというべきか？

おそらくそれは、澄み切った青い空の色をしている。心が一瞬に晴れわたるような明るい色である。

先日、大阪の知人が「この間、買い物で神戸に行ったんだが、神戸はほんとにいいねえ」と感嘆していた。たぶん彼は、神戸の町全体を包みこんでいる、あの青い空の色に心をひかれたのだといえるだろう。神戸には、くすんだ色というものはない。たとえば元町やセンター街を歩いてみてもよい。あるいは三宮のオフィス街を歩いてみてもよい。六甲山か摩耶山に登ってみてもよろしい。須磨や舞子の海岸を歩いてみるのもよかろう。そこでは心が疲れるということがほとんどないのである。

商店街のショウウィンドウは、たんにはなやかなのではない。同時にどこかスマートでアカぬけがしている。都心はなるほど賑かだが、身動きできないという賑かさではなく、いわばそれは適度に賑わっている。この適度にという感覚が、神戸を考えるうえで大事なポイントだ。〝神戸っ子〟の肌に、ケバケバしいもの、毒々しいものは合わない。いわばだれもが清潔好きなのだといってよかろう。

そのことは、たとえば神戸と大阪の〝水〟を考えてみればよい。ここで水というのは水道のそれでなく、公園のなかの水のことだが、神戸市役所の南に噴水のある公園がある。白い水が噴きあげている。大阪の中之島公園と比較してみるとよい。傍を堂島川が流れているが、その流れはどこか澱んでいる。大阪に白い水はない。

だから、私が青い空の色というのは結局、町にただよっているムードのことである。神戸のムードはいうまでもなく明るい。

エキゾチシズム

ムードという点からいえば、もう一つある。それは神戸のエキゾチシズムといったらいいか。

昨年の夏、作家の大岡昇平氏が神戸にこられたとき、たまたまお目にかかることができたのだが、談、氏の神戸の思い出に及んだところ、氏はおよそ次のようにいった。

「当時、神戸ってところは、われわれインテリの憧れの町だったんですよ。なんとなくハイカラな感じがしてね。神戸のエキゾチックな雰囲気を想像して憧れていたんでしょうね。マドロスのいるバーなんかに行って連中と一緒に酒を飲むのが、なんとなくうれしいという気持があったな。

『アカデミー』っていうスタンド・バーがあって、そこは女のいないバーなんだ。そういうところで酒を飲んでちょっと気取ってみたい、そんな気持もあった。」

アカデミーは、今も多くのファンをもっているが、この大岡氏の回想談は、神戸が多くの人々の憧れを誘うゆえんのものを示していて私には忘れがたいのだが、つまり、それは、「神戸のエキゾチックな雰囲気」という一点につきるのではなかろうか。

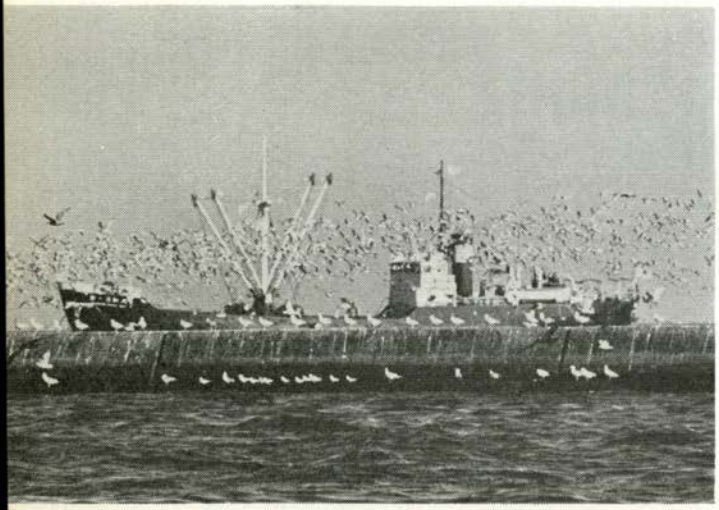
「ハイカラ」とか「エキゾチックな雰囲気」という言葉は、神戸を語るには欠かせぬものだし、「マドロスのいるバー」というのも、ありきたりだけど、こういう風俗が似合うのは神戸をおいて他にはなさそうだ。

となると、どうしても港町としての神戸という性格がうかんでこざるをえない。

町にたくさん外人が住んでいるのはいうまでもないが、外国船員がしょっちゅう出入りしているから、神戸の人は外国人をみたからといって、べつに珍しがりはしない。こういう町では、人種的な偏見というものが起りようがない。外国人の姿なり外国的な風俗が、市民の日常生活のなかに、ごく自然に融けこんでしまっているからだ。

また、それを逆に考えると、神戸の人は、自らが外国に出かけていくのも平気なのだ。どこか遠い所へ出ていくという不安感は少ない。これは港っ子の感覚であって、たえず船の出入りをみているから、海の向うに「世界」というものの存在を思いうかべる想像力が自然に身についているし、しかも海の向うの「世界」をごく親しいものとして受けいれる素地ができているのである。神戸の商店街の社長ほど、気軽るに、しかもたびたび海外旅行に出かけている商店主は少ないのではないか。こういう身軽るさは、同時に、神戸に新しいセンスや形をとりいれるうえで、大きな役割を果しているというべきだろう。海外の新しいアイデアや流行を、神戸はすばやくとりいれ、それをかなり上手に消化していく能力を備えているようである。

神戸港へ入港した外国観光船。神戸への期待に表情もほころぶ外人客



かもめのむらがり、飛びたつ神戸港沖。港ならではの風景

神戸の文化

神戸は文化不毛の地だという。だれがいいだしたか知らないが、今ではひとつの流行語みたいになってしまった。神戸は文化不毛の地などと書くと、ああまたかと思われそうである。

こういう言葉なり定評は俗耳に入りやすいのが欠点で、それが実質的になにを意味しているかを人々は忘れてしまう。だから、不毛などとはとんでもない、立派な作家や画家や音楽家がいるではないか、という見当はずれの反論がかえってくるのだ。

私は、この「るぽるたーじゅ・コウベ」において、一度は文化団体をとりあげてみたいと思っていたが、ついにそれは果たせなかった。まともな文化団体なんか、どこにもありはしないからである。

なるほど個々人の業績としてみれば、神戸の文化が生産的でないなどというのはまちがいだろう。全国的な意味で、すぐれて文化的な仕事を果たしている人は、ざっと数えただけでも10人はいるであろう。

だが、ここで考えているのは、そういう個々人の文化的業績のことではない。

神戸の文化のいわば〝軽さ〟の問題だ。つまり、個々の人びとのもっているエネルギーが、ひとつの大きな力に結集されて、町全体にしっかりとした文化への要求が生みだされてゆくという動きが、少なくとも今のところみられない。

たとえば、美術館建設運動にしてもそうだ。私は美術館建設に賛成だが、問題はそれがどこまで市民の統一的な要求に支えられているか、ということだろう。それがなければ、運動自体も美術館そのものも、一部の人々の私物と化すだけである。そこで問題はこうなると思う。

ひとつは、いったい神戸市民のなかに、文化というものへの渇望がどれだけうずいているのか、という根本的な問題だ。より正確には、神戸で生まれた、あるいはげんに生まれている文化、あるいは今後生みだしてゆかねばならぬ文化というものに、はたして神戸市民はどれだけふかい関心をもっているか?といい直した方がよい。私がこんなことをいうのは、一流の音楽をききたければ大阪フェスティバルホールへ行けばよい、立派な絵画展をみたければ、京都へ行けばよいという意見を、実さいに何度か耳にしているからである。なるほど、それも一つの考え方だが、こういう意見が出るということは、まさに神戸の文化を支える基盤がどれほど弱々しいものであるか、ということを如実に示す好例である。

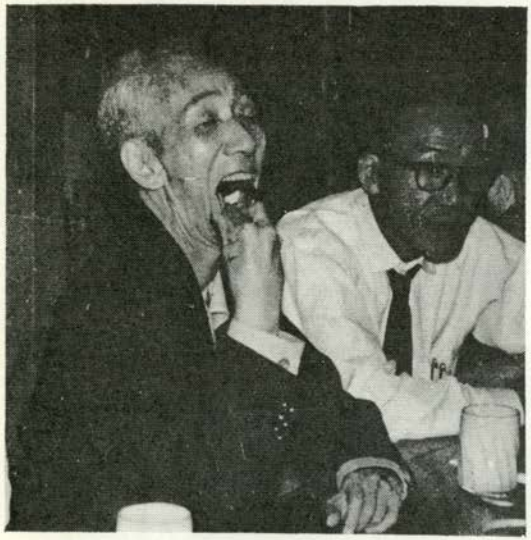
このような意見に、しかし、理屈で対抗してもムダである。なぜなら、彼らは、文化というものを自分の生活している場所において、自ら生みだしていくものとは考えずに、たとえば、隣りの都市へ出かけていけば、ただちに見物できるものと思いこんでいるのだから。

私は今、いったい神戸の詩人たちが、作家たちが、音楽家たちが、画家たちが、彼らの創造の仕事において、どれだけ神戸の人々の心を動かしてきたのだろう? という深刻な疑問に逢着している。彼らの仕事は、はたして市民の人々の心と結びついているだろうか。人々の生活の方向に、なにものかを与えることができていただろうか。それはただ、たとえば個展をひらいた画廊で、あたかも流行の意匠をみるような目で、ただ見物されただけではなかったか。人々の心を激しくゆり動かして、彼らの人生になにほどかの力を与えたということがあっただろうか。

市民や政治家が、文化に無関心だと責めるだけではどうにもならない。必要なことは、文化の創造にたずさわる者たちが、自らの作品なり仕事をつうじて人々の心と生活を動かしてゆくことだ。それが町の文化をつくる。その時、はじめて詩人も画家も市民と結びつくだろう。

おそらく神戸の文化は、いわゆる文化人の文化である。市民との連帯を欠いている。神戸が文化不毛の地だという表現のそれが正確な意味である。

喜久の香や
勲一等が
口を張り
又平



写真は又平で鮓をほほばる林又一郎丈

神戸三宮生田ノ社ノ西

鮓の又平

電話・三の宮 ㉝ 0935

餅入ぞうすい
洋風うどん
和風ぞうすい
餅入うどん
洋風ぞうすい
いずれも百五十円

グリル喫茶 杉の
サービスランチ
毎日献立が
変わります
スープ付 150円

元町通3丁目本高砂屋2階TEL㉝7368

呉服・洋装
みよしや
電話神戸㉝三三八八～九番
大阪店 阪神百貨店三階
電話 大阪 (361) 五五四八番
姫路店やまとやしき百貨店三階
電話 姫路 ㉓ 一二二一番
衣裳部 三宮町三丁目柳筋
電話 ㉝ 五一六五番

ボン・パリー
何から何まで
渋好みのパリッ子
ボン・パリーは洋菓子の
本場フランスの味です
ブドーと洋酒を上品に、
ミックスした風味あるお
菓子です
アルモンド
本 店 神戸市生田区元町通2の43
直売所 神戸大丸・新聞会館秀品店
本店TEL㉝2203